

佐賀県教育センター
平成10年3月3日



もくじ

- ◆特集 クラスに心の居場所を…………… 2～5
～いじめ・不登校を生まないクラスづくりのために～
- ◆評価シリーズ …………… 6～9
 - ・小学校道徳 『総合単元的な道徳学習の構築に向けて』
 - ・中学校特別活動『横断的な学習を取り入れた進路指導の工夫』
- ◆校内研究 ～我が校の取組～…………… 10
 - ・鹿島市立明倫小学校『明倫の総合学習と「明倫祭り」』
 - ・鹿島市立東部中学校
『豊かな心を持ち、自主的・自律的に活動する学級集団づくり』
- ◆初任者研修の一年…………… 11
- ◆「佐賀再発見」シリーズ～熱気球と風～…………… 12
- ◆メッセージボード
 - ・平成10年度短期研修講座
 - ・平成10年度教育論文募集の案内

《巻頭言》

新たな挑戦の年に

研修一課長 蒲原 安則



教師は、年度が変わると気持ちも一新するから
おもしろい。「今年こそは」と新たな気分になる
が、教育には難題も多く、思いどおりにはいかな
い。教育の危機は、教師にとっても危機なのであ
る。

教育に携わる者には、諸問題の解決に向かって
希望を持ち、積極的に挑み、常に打開の道を探る
ことが求められている。現代の児童生徒は、体
力・思考力・意志力が脆弱で、それに心情が豊か
でない一面がみられるとともに人間関係で、悩み、
コミュニケーション能力に欠け、指示待ち族だと
指摘されている。そこで、自己教育力を育み、自
己実現が成就するような支援の必要がある。

ある日、TV放映を見た。働き蟻を100匹観察
瓶に入れ、何匹稼働するかの観察実験だった。結
果は20匹であった。その後、稼働した20匹ずつを
1瓶に集め、100匹にしてどれだけ働くかを試み
た。その結果もやはり20匹であった。

ここで問題なのは、観察瓶のような外界と閉ざ
した環境をつくったことである。同じようなこと
が教室でも言えそうだ。環境づくりの困難さであ
る。教育環境づくりの担い手として教師があり、
現在最も求められているのが教師の「心の教育」

への意識づくりである。

「心の教育」は、昭和59年9月に発足した臨時
教育審議会で提唱されて久しいが、このことは現
今、緊急でかつ、重大で、しかも深刻な教育課題
でもある。また、いじめ、不登校、校内暴力等の
諸問題の解決についても教師と子どもとが本音で
話し合い、真剣に取り組まないと糸口は見いだせ
ない。

今こそ教師は、児童生徒と一体となり、インター
アクトする中で「共に育ちあう」ことが大切であ
る。そして松明の炎のような教育愛を胸にともし、
一方涼しく冴えた理性でもって一人一人の子ども
たちの教育的伸長を図ることが肝要である。教師
は、子どものために自ら資質向上に努め、専門職
としての信念と力量を具備して教育実践に挑戦す
ることが重要である。

以前から、「教育は人なり」、「世直しの源泉は
教育にある」等々、教育に対する願いは大きかつ
たが、今ほど教育に期待する世論の声が大きな時
はない。

平成10年度は、教育の諸課題に対して、新たな
挑戦の年になり、教育の成果がさらに見えてくる
ようにしたい。

いじめ・不登校を生まない クラスづくりのために

今、学校生活をより豊かにより充実したものとするために、子ども一人一人の持つ個性を大切にすることが教育に求められています。

そのために、教育相談の基本的な姿勢である、相手に対する積極的関心・共感的理解・受容的な態度など『カウンセリング・マインド』を生かした学級経営の在り方が注目されています。

そこで、『カウンセリング・マインド』をどのように学級経営に生かせば、子ども一人一人の持つ個性が大切にされ、教師と子ども、及び子ども相互の間に好ましい人間関係がつくり出され、親和感に満ちた学級が生み出されるか考えてみたいと思います。

カウンセリング・マインドを生かした学級経営

日常の触れ合いを大切に！

担任は、受け持ちのクラスの子どものとの接触の場を豊富に持っているので、担任でなくてはつかめないような子どもの日常の様子を把握することができます。

その利点を生かせば、子どもとの日常的な触れ合いを通じて、多面的、総合的に子ども理解を深めていくことができます。

実践例1

小学校のA教諭は、登校時に自分から「おはよう」の声をかけ、入室時には常に笑顔を絶やさないように心がけている。名前を呼ぶ時には「〇〇くん」「〇〇さん」といった温かい言葉かけをしながら、しっかりと子どもを見て、いわば『まなざしによる触れ合い』を忘れないようにしている。休み時間には、できるだけ教室に行ってお話するように心がけ、友達と遊んでいるかどうかなどを観察している。給食時には、ゲストとしてグループの中に入り、話をしながら楽しく給食をとったり、掃除の時間などには、一緒に掃除したりして、できるだけ触れ合いの時間を多く持つようにしている。このような触れ合いを通じて、子ども一人一人の日常の様子がよく見えるようになった。

実践例2

中学校のB教諭は、クラスの生徒全員の名前を記入したノートを作り、一日の終わりにそのノートを開いて、言葉かけを行った生徒の欄に〇をつけ、印象に残ることがあれば、その内容を記入している。

最初はただ〇をつけるだけだったが、それによって教師による言葉かけの多い生徒と、少ない生徒との差が意外にも大きいことに気づき、様々な場面で、できるだけ多くの生徒との対話を行うよう努力することにした。意識的にそのノートを利用していきうちに、生徒一人一人との対話の内容が、記憶の中に残るようになった。

その結果、どの子にも目が向くようになり、生徒自身を総合的にとらえられるようになった。

子ども理解の工夫を！

学級経営の第一歩は、クラスの一人一人の子ども理解から始まると言われます。

担任は、子どもとの日常的な触れ合いを大切にしながら、そこで得られた情報を記録として残し、それぞれの学年を担当した教師がその情報を継続的に活用できるよう整理しておくことが望まれます。

実践例3

中学校のC教諭は、生徒理解のために、学業記録などとともに「面接カード」を保存し、そうした資料をもとに、継続的な面接が実施できるような工夫をしている。

高校のD教諭は、始業前の時間を使って毎日一人15分ずつ、クラスの生徒全員と面接する計画を立て実行している。

最初、朝早く登校することは、生徒たちにとってつらいように思われたが、教諭はその趣旨をしっかりと説明し、生徒の希望を聞きながら計画を立てた。話の内容は、学業、進路、部活動、友人関係など様々だが、できる限り生徒から話題を提供させ、教諭は丁寧に聴くように心がけた。もちろん秘密を厳守したので、生徒たちは教諭を信頼し、この時間を大切なものと考え、楽しみに待つようになった。



自己理解と相互理解を！

担任は、日常的な触れ合いのみならず、朝の会、帰りの会、学級・ホームルーム活動、班活動などの指導を通して、意図的・継続的に子ども集団に働きかけ、一人一人の子どもの自己理解と、クラスの成員間の相互理解を図っていく必要があります。

子どもが安心して自己の心情を言語で表出できるようにするためには、クラス内における受容的な雰囲気と、成員間の相互理解による信頼関係が必要です。

実践例4

小学校のE教諭は、子どもの自己理解と相互理解を深めるために、「班ノート」を活用している。

「班ノート」の記入が習慣化するまでは、記入者の順序を守らせたり、必ず提出させるなど、細かい指導をしてきた。教諭は、「班ノート」にコメントを入れる際に、子どもの自己理解においても、相互理解においても、努めて肯定的な側面に注目させ、それを伸ばしていけるよう、子どもに働きかける配慮をしている。

そうしているうちに、子ども自身が自分のよさを再認識するようになって、消極的な子も自信を持つようになった。

肯定的な自己概念の育成を！

子ども一人一人は、それぞれに長所や特技を持っていますが、クラスの中で担任や友達に認められ、ほめられる時、それは子どもの肯定的な自己概念の確立へとつながっていきます。

そうした子どもの長所や特技を、例えば、「学級（ホームルーム）通信」や「班新聞」の中で紹介したり、学級・ホームルーム活動や学校行事の中で生かしたりできるよう、担任は子どもの活躍できる場面をより多く作り出してやる必要があります。

グループ体験を生かした 学級づくり

構成的グループエンカウンターは、「グループは教育者である」という考えに立った集団体験学習の一つです。したがって、人間関係を基盤とする日常的教育活動の中で、広く応用されています。子どもにとって、居心地のいいクラスとは次のような集団です。

- ・温かな人間関係の感じられる集団
- ・相手の身になって話を聞き、話すことのできる集団
- ・過度の遠慮や防衛をせずに自己表現、自己主張ができる集団
- ・特定の感情や行動にとらわれない集団

このような、お互いに優しくなれて、学びあえる集団・クラスづくりのためのエクササイズ（演習）の紹介と、それを実施する際の留意点をあげます。

ここに紹介するのは、エクササイズの一例であり、実施するにあたっては、校種や学級・クラスの実態に合わせて工夫が必要です。

＜エクササイズを実施する際の主な留意点＞

- ①子どもたちがのびのびと歓声をあげることができるように、体育館など広い場所を選ぶ。
- ②教室で実施する時は、隣のクラスへの配慮等も忘れないようにする。
- ③所要時間はあくまでも目安であり、時間に余裕があれば、エクササイズをやった後の感想をみんなで話し合わせる。
- ④学級・ホームルーム活動の年間計画にそって、年間を通じて適宜実施するようにする。
- ⑤クラスがまだ一つにまとまっていない年度初めの「学級開き」での実施は、特に効果がある。

（１）名前あつめ〔所要時間20分程度〕

＜ねらい＞

短い時間でクラス全員とあいさつを交わすことができ、名前を書いてもらうという目的があるので、話すことに抵抗も少なく、また親近感も増し、クラスを和やかな雰囲気にする。

＜内 容＞

- ①B4程度の用紙を配布し、2つ折りを繰り返して折り目をつけ、スペースをクラス人数＋教師分もうける。32人を越えるときは、斜線を引いて人数分のスペースを用意する。
- ②各スペースに左上から右へ順に番号を書く。
- ③出席番号などを利用し、クラス全員と教師に番号をつける。自分の番号のところに○をつけ、名前を書く。
- ④各自、用紙を持ってクラス内を自由に動き回り、出会った人と紙を交換して自分の番号のところに名前を書き、「よろしくお願いします」と握手を交わし、紙を返す。教師も参加する。
- ⑤全員の名前が集まったら席につく。
- ⑥最後の2人には皆で拍手する。

＜留意点＞

教師も参加した方が盛り上がるし、親近感も増す。また、このエクササイズは、クラス全体が仲良くなるのが目的であり、早く終わる競争でないことを理解させてから始める。

（２）私の秘密〔所要時間20分程度〕

＜ねらい＞

まず担任が自己開示をすることで子どもたちとの信頼関係づくりを図る。

＜内 容＞

- ①四人組を作り、机を寄せて座る。
- ②担任が「自分に関する」クイズを1問ずつ読む。
- ③子どもたちはグループで答えを話し合って、イエスカノーかシートに記入する。
- ④全問終わったところで正解を言い、担任がおもしろく自己紹介をする。
- ⑤グループごとに正答数を挙手で確認し、一番多かったグループに拍手をする。
- ⑥グループで担任への追加質問を話し合い、順番に質問する。担任はできる範囲で答える。

＜留意点＞

イエスカノーで答えられる質問を多く考えておくことが大切である。また、教師は子どもたちからの質問に、「ノーコメント」の意志表示もできる。



（３）この指とまれ！〔所要時間20分程度〕

＜ねらい＞

子ども一人一人がその時々でいろいろなグループに所属していることから、お互いの共通部分や違って点に気づいていく。また、グループ体験の中で、認め合い、協力することの大切さを学ぶ。

＜内 容＞

- ①「生まれた月」「血液型」「星座」「名前のイニシャル」など、教師がひとつのテーマを提示する。
- ②例えば、「生まれた月」と教師が言えば、子どもたちは、自分の誕生月を言いながら仲間を集め、グループを作る。
- ③グループができたら、教師は別のテーマを提示し、グループを組み直す。
- ④できたグループを次の演習に生かすのもよい。

＜留意点＞

全員がどこかに入るようなテーマを選定し、できるだけ一人のグループがないように配慮する。また、机や椅子を教室の周辺に移動し、広い空間を作っておくようにする。

参 考 文 献

- 1) 文部省「小学校における教育相談の進め方」(小学生徒指導資料7) 平成3年
- 2) 文部省「学校における教育相談の考え方・進め方—中学校・高等学校編」 平成2年
- 3) 國分康孝編「構成的グループ・エンカウンター」1996 (株誠信書房)
- 4) 縫部義憲編「教師と生徒の人間づくり」(第1集～4集) (株瀝々社)
- 5) 岡田 弘編「エンカウンターで学級が変わる」(小・中学校編) (株図書文化社)

総合単元的な道徳学習の構築に向けて

一問題解決的な学習のスタイルを取り入れて一

所員 吉村 清美



1. はじめに

「こんなことをすると、気持ちがいいな。」
「もっと役に立つことができないかな。」そんなことを考えている子どもの瞳は、キラキラと輝いています。道徳教育は、まさにこんな子どもたちを育成する教育活動の一つです。

そこで、各教科や特別活動等の各教育活動の特質を生かしながら、共通した道徳的価値に関する学習内容について、道徳の時間を中心に有機的なまとまりを持たせた学習活動である総合単元的な道徳学習について紹介をしたいと思います。

2. 総合単元だからできる道徳の授業

心に感じ、心を動かす授業は、自分自身との出会いのある授業です。主体的なかかわりや内面的なたがやしが行われるためには、今までの自分自身との問いかけがなければ不可能です。そこで、その問いかけをもとに学習課題を設定し、体験との関連を図った授業実践に嬉野町立大野原小学校の事例があります。

今までの実践が点だとすると、**学習課題**を通すことで道徳の時間を線とし、体験活動との関連を図ることで面とした事例です。

3. 指導の実際

(1) 問題解決的な学習を取り入れて

子どもの主体的に学ぶ姿勢を支援し、価値の内面的な自覚を深めさせる指導の工夫として、問題解決的な学習のスタイルを取り入れ、**学習課題**を設定しました。この課題は、単元を通しての連続した課題であり、子どもの体験や経験などの事実認識から生まれたものです。

(2) 学習課題を設定した基本的指導過程

導入	《学習課題を持つ》 今までの体験や経験、他教科との関連から、共通の課題を認識し、自己を振り返り、自らの課題意識を持つ
展開	学習の見通しを持ち、資料を通してみがきあい、ねらいとする価値について追求・把握する
開	《焦点化する》 資料を通して、課題解決のための手がかりとなる事実について自由に考え、発表し、話し合う 《共感する》 追求する主人公の姿について、他者との練り合いを通して自己の価値観を明らかにし、気づかなかった価値観について認識する
終	《自覚化と意欲化》 ・自分の生き方のなかに、資料に含まれる同質性、異質性を見だし、実践への意欲と勇気を持つ ・本時の学習を振り返り、日常生活の中にある自己の課題に気づき、実践への意欲を持つ
末	

(3) 学習指導案 (中学年)

①総合主題名 「友達ってすばらしい」

②総合主題のねらい

友達のすばらしさを改めて知り、互いに理解し、信頼し、助け合う態度を育てる。

③総合主題の構成 (同一価値総合型)

次	主 題 名 (資 料 名)
1 次	助け合う友だち (かいがら) 2-(3) 学研
2 次 本時	友だちへの忠告 (絵はがきと切手) 2-(3) 学研
3 次	本当の友だち (赤いお守り) 2-(3) 文溪
	《体験活動との関連》 ・交流学习での助け合いや出会いを共通体験として示す。 ・学級の目標達成を祝うことで、友だちどうしの助け合いの喜びを味わわせる。 (七夕集会など)

④本時 (第2次) のねらい

ひろこと家族の考えを通して、友達の過ちに対してどうしたらいいのか十分に話し合わせ、友達に思い切って忠告することは大切なことだということに気づかせる。

⑤本時の展開

過程	学習活動 主な発問	教師の支援 期待される児童の変容
つかむ	学習課題 友だちにしてあげられることには、どんなことがあるだろうか。	・第1次「かいがら」の学習後の反応やアンケートにより、児童の実態にあうような課題を設定し、連続した課題意識を持てるようにする。
見通す	1 アンケートの結果などから、学習課題をしっかりとらえる。 2 第1次学習を想起し、友だちの存在の大切さについて改めて思い出す。 3 資料「絵はがきと切手」を再読し、話し合う。	・かいがらをくれた「中山君」の気持ちとその後の2人について話し合わせる。 ・話し合いは、母と兄の気持ちについて行わせるようにする。 ・迷うひろの気持ちは随時発問して出させるようにする。 ・立場を交替して行い、それぞれの考えに共感させるようにする。
追求する	兄と母は、どんな気持ちからひろこにアドバイスしたのだろうか。 ○兄、母、ひろこの3つのグループの役割を決め、対話活動を行う。 ・兄の立場 不足料金を知らせる ・母の立場 お礼だけでいい ・ひろこ 迷い ○ ひろこの気持ちを記述する。 ひろこはどんなことを考えているでしょう。	友だちを思う気持ちが、忠告につながるという視点で話し合いが進んでいるか。 ・話し合いの中での、ひろこの気持ちについて書かせ、多様な価値観に気づかせる。 ひろこの気持ちをより深くとらえて記述できたか。
広げる	○手紙を書いてスッキリしているひろこの姿に気づく。 書き終わったひろこの気持ちはどうでしょう。 4 学習課題についてもう一度考え、ワークに記述する。	・迷っている姿から、友だちのことを思いやって実行したひろこの気持ちに気づかせる。 ・学習課題を振り返りながら、友だちにしてあげられることについて書かせる。

⑥本単元を通しての成果

一つの価値内容を単元として発展的に取り扱うことで、第3次の「赤いお守り」では、より深められた価値に気づく子どもが多かったように思われます。これは、単元を通しての**学習課題**を設定したことで課題意識の連続化が図られ、それぞれの子どもが持つ価値観が深められていったからと考えられます。また、本単元との関連のある体験活動「七夕集会」では、下級生にかざりを作ってあげるのではなく、作り方を教えて、できたことを共に喜ぶという子どもの姿が見られ、実践への意欲を感じることができました。

4. おわりに

今回、紹介した事例は、総合単元的な道徳学習を構築する際の一つの組み方です。その他にも複数の価値項目の組み合わせで道徳の時間をつないだり、他教科との関連を持たせたりなど様々な総合単元化があると思います。その際、「子どもの意識の流れ」を一番大事にしていくことが重要です。今回の実践では、単元を通しての**学習課題**がその役目を担っています。また、「何を考えるのか。」がはっきりしているために主体的な学習への取組が期待できます。

さらに、総合単元的な道徳学習は、1時間完結型ではなく、ある程度のスパンで単元構成を図っていることで、評価という面からも道徳性が常に変容していることを考えると長期的評価が可能になります。また、教師自身も子どもの日常生活での様子を道徳的側面から単元実施期間は特に意識的に見ていくことが必要です。子どものよさを認めていく姿勢を基本に、指導計画段階は緻密に、実態の変容に応じて実践段階は弾力的に考えていくことが肝要です。

全教育活動の中で行う道徳教育を具現化した一つの方策が総合単元的な道徳学習です。

横断的な学習を取り入れた

進路指導の工夫

所員 御 厨 秀 樹



1. はじめに

中学校学習指導要領第4章「特別活動」第2のA「学級活動」の内容(3)に、「将来の生き方と進路の適切な選択に関すること」が示され、生き方の教育としての進路指導がこれまで以上に要請されています。

各学校でも、職場訪問(体験)などの啓発的な体験学習が取り入れられ、進路指導の改善が図られていますが、さらに体系的・効果的な取組が期待されています。そこで、今回は進路指導での横断的な学習を紹介します。

2. 進路指導と横断的な学習

(1) 横断的な学習

進路指導が整理・統合・深化される場合は学級活動ですが、各教科や道徳においても将来の生き方や職業的発達をうながすような進路に関する内容は多くあります。これらを関連させ、共通する内容をひとまとまりとした学習(横断的な学習)は、次のような特質があります。

- ① 各教科・領域に分散する細切れの指導を避けることができる。
- ② 学習のねらいを関連づけることにより、生徒の見方・考え方が広がる。
- ③ 各教科・領域の特性を生かし、学習指導要領の枠内で実践できる。

また、横断的な学習は第15期中央教育審議会の第一次答申にも総合的な学習と併記して示され、「生きる力」を育成するための有効な指導方法として注目されています。

特に、特別活動と道徳を関連させた指導については、指導書(特別活動編)にも「道徳の時間との関連を大切にした指導を行う必要がある」と述べられています。

なお、横断的な学習を進める場合の留意点は次のようなことです。

- ① 必要性やテーマを吟味・明確化し、まとまりのある学習とする。
- ② 各教科・道徳・特別活動の関連のさせ方を、内容に応じて創意工夫する。
- ③ 実態に応じて、継続化や集中化を図りカリキュラム構成を弾力的に行う。

(2) 進路指導での横断的な学習のテーマ例

- ① 『自分を知ろう(自己理解)』
- ② 『将来を展望しよう(進路計画)』
- ③ 『職業について考えよう(職業観)』
- ④ 『人々の生き方に学ぼう(人生観)』
- ⑤ 『体験から学ぼう(啓発的経験)』
- ⑥ その他(進路情報や進路相談等)

3. 指導計画

『自分を知ろう(自己理解)』をテーマにして、1年生で社会科・学級活動・道徳を関連させた横断的な学習(全4時間)を計画してみました。

(1) テーマ設定の理由(抜粋)

自我に目覚め始めるこの時期に、多面的に自分を見つめ、自己理解を図ることは自己の特性や個性への関心が高まり、自らの生き方や将来に対する目的意識が育ち、主体的な進路選択や自己実現への意欲の高まりが期待できる。

また、自己理解を基盤とし、自己指導力の育成を図り自己実現をめざす、生徒指導の視点からも極めて重要である。(図1)

自己理解 ⇄ 自己指導 ⇄ 自己実現

図1 「自己理解から自己実現までの流れ」

(2) 関連構想の作成

横断的な学習を進めるにあたり、テーマとそれぞれの学習内容の関連を明確にするため、「全体構想」(図2)及び、「指導構想」(図3)として表しました。

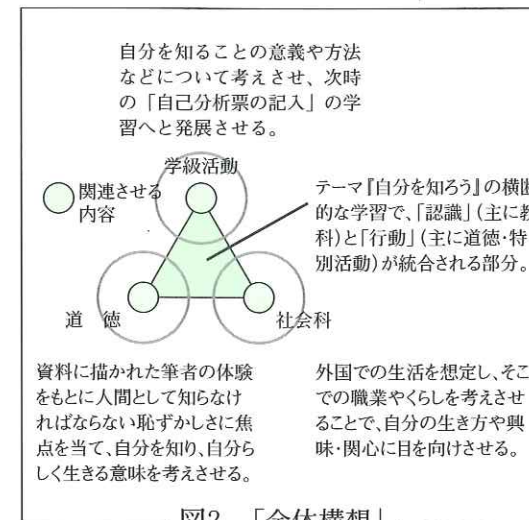


図2 「全体構想」

○社会科

- 【単元：人々の生活と環境(地理的分野)】
【本時の題材：「〇〇国での私の生活」
補充・深化学習 本時(13/13)】
【本時のねらい】
① 課題学習で調べた国で、自分が生活をしていく場合の生活設計を、その国の特色をふまえて、現実的、多面的に思考する能力を育成する。
② 自分の将来の職業や生活について考えようとする意欲や態度を育成する。

○学級活動

- 【題材：『自分を知ろう 1』】
内容(3) (本時1/2)
【題材のねらい】
① 人の個性は十人十色であり、多様な個性を互いが認め合うことの大切さに気づかせると共に、将来の進路選択や生き方を考える場合は、自分の特性や個性を知ることの大切さを理解させる。
② 次時の学級活動「自己分析票の記入」への導入を意図しながら、自分を知るための方法や内容について考えさせると共に、自分の将来の夢や希望に向けて、積極的に自己理解を図ろうとする意欲や態度を育成する。
【主な活動内容】
① 導入としてゲーム「私は誰でしょう」を行う。
② 「十人十色」について考える。
③ 「自分を知る」ことの大切さについて考える。
④ 自分の特徴を知る方法を発表する。(第三者の助言・諸検査・自己分析)
⑤ 自分の特徴は、どんな内容を調べれば知ることができるかを話し合う。(興味・関心、性格、学習、生き方、希望職業等)

○道徳

- 【主題名：自分らしく生きる】
内容項目1- (3) (本時1/1)
【資料名：「“自分を知る”ことの尊さ」】
【本時のねらい】
① これまでの自分をふり振り返り、今後の生活に生かそうとする意欲を高める。
② 自ら考え、責任を持って自主的に判断し、行動しようとする態度を育成する。

○学級活動

- 【題材：『自分を知ろう 2』(自己分析票の記入)】
内容(3) (本時2/2)
【題材のねらい】
① 自己分析票の記入方法や活用方法を理解させる。
② 記入した自己分析票の結果を、今後の生活や学習の改善に生かそうとする意欲や態度を育成し、実践化を図る。
【主な活動内容】
① 前時の活動について想起する。
② 「自己分析票」記入の目的や記入の方法について、教師の説明を聞く。
③ 「自己分析票」を記入する。
④ 記入後わかった自分の特徴を簡単にまとめる。
⑤ 実践化へ向け、今後の努力点を各自で決める。

図3 「指導構想」

4. 評価

横断的な学習は、各教科・領域の特性を生かす学習であるため、評価についてもそれぞれの特性を生かした観点で評価することが基本となります。

特別活動(学級活動)も、一般に次の三つが評価の対象とされていますが、活動内容に応じた評価の観点を設定していくことが必要です。

- (1) 生徒の実態把握や指導立案に関する評価
(「診断的評価」…主に活動前の評価)
- (2) 個人及び集団の発達過程に関する評価
(「形成的評価」…主に活動中の評価)
- (3) 一人一人の生徒の発達に関する評価
(「総括的評価」…主に活動後の評価)

評価方法は多様なものがありますが、生涯学習や自己指導力の育成が叫ばれている中、今後特に重視すべきことは、自己評価能力の育成とされています。相互評価などと併用すれば、より効果が期待できます。

<参考文献>

高階玲治編『実践クロスカリキュラム』1996
(図書文化社)他

校内研究

～我が校の取組～

明倫の総合学習と「明倫祭り」

鹿島市立明倫小学校 校長 水山 泰 郎

本校は、開校以来TTの研究を推進してきた。本年度から、今まで以上に子どもの興味・関心から学習を構築するために、TTによる総合学習の研究に取り組み始めた。本校の総合学習は、各学年学習テーマを設け、そのテーマをもとに学んでみたい内容を、年間を通して追究していく。学習テーマは、1年「みんななかよし」、2年「いのち」、3年「見つめよう私たちの明倫校区」、4年「ふるさと鹿島、自然とともに生きよう」、5年「命を知ろう、命を守ろう」、6年「国際理解と日本の伝統文化」である。

学習テーマをもとに追究活動を行うが、追究の結果を発表する場として、「明倫祭り」を開催する。1年生はみんなで仲良く「いも祭り」を展開し、6年生は「やってみよう世界の文化、日本の文化」というテーマでさまざまな発表を行った。外国語劇や5か国ファッションショー、野だてなど子どもの学びが生きた発表であった。



豊かな心を持ち、自主的・自律的に活動する学級集団づくり

～道徳の時間の充実と学校づくりによる道徳実践力の向上を目指して～
鹿島市立東部中学校 校長 小野原 利 幸

本校は、平成7・8年度に文部省、佐賀県教育委員会、鹿島市教育委員会より道徳教育推進校の指定を受け、昨年度に研究成果の発表を終えたばかりである。2年間の研究実践で成果は残したものの、成し得なかった課題が数点残り、本年度はその解決を中心に取組をした。特に「学級づくり」に重点を置き道徳の授業実践とともに、道徳実践の場を学級活動の中に見いだすことにした。

そして、専門研究部会を①授業研究部会②学級づくり研究部会の2つにまとめ、授業研究部会では、昨年までの3パターンの展開例を中心に新しい資料の開拓と、発問、ノートについて、学級づくり研究部会では、朝・帰りの会、話し合い活動、班長会・学級会、教室環境整備について研究を深めている。

今後は、道徳の新資料（視聴覚教材）の開発と、「学級の中で道徳性をどのように発現させていくか」について研究する予定である。



初任者研修の一年

初任者研修

実践的指導力、使命感、幅広い知見を
体得することをめざして――

現職研修の一環として新任教員176名（小学校～37名、中学校～54名、高等学校～63名、特殊教育諸学校～22名）に1年間の初任者研修を実施しています。

初任者にとって研修が魅力的で意欲的に取り組めるよう、研修内容・研修形態を工夫しています。具体的には体験研修、宿泊研修、教養講座から、すぐ役立つ実践講座まで、その内容は豊富です。また、研修の効果を上げるために、研修の場も教育センターだけではなく、いろいろな施設を活用し、地域・環境の特性も生かして進めています。

特に、本年度から高等学校・特殊教育諸学校に取り入れた県内企業や福祉施設での体験研修は初任者に好評で、企業の姿勢や福祉の現状を体験を通して学び、意義深い研修となりました。

来年度も、体験研修の充実をめざして初任者研修を計画しています。特に、小・中学校にも企業・福祉施設での研修の枠を広げていきます。

次に、体験研修を終えたあとの初任者の声を紹介しします。

○ 企業における体験研修

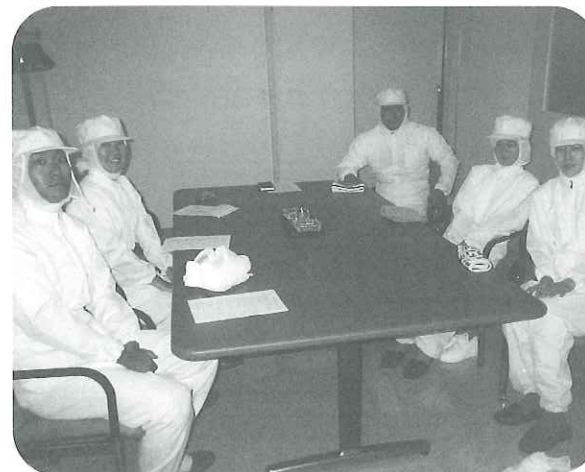
“物を作るのは人”であり、その“人をどう育てていくのか”を念頭に置き、事業を展開しているという話を伺って、私達にも相通じるところがあることを知りました。

○ 福祉施設における体験研修

精神面のケアや自己決定をさせるという指導方針など、生徒に還元できることだと思いました。

○ 農業大学校における体験学習

玉ねぎを出荷するために根を切り、皮をむく作業をしました。短時間だったので楽しかったのですが、これが何時間も続くと、きついだろうなと思い、農家の人達の大変な苦勞のほんの一部分に触れることができたように思いました。



企業での体験研修



農業大学校での体験学習風景

「佐賀再発見」シリーズ



佐賀平野にぽっかりと浮かぶバルーン。もう最近では晩秋の佐賀の名物になってきました。

あのバルーンを見ていて疑問に思ったことはないでしょうか。どうして朝と夕方しか競技を行わないのか？ どうして、同じ風で皆同じ方向に流されて競技ができるのか？ と。そこで今回は、気球を取り巻く佐賀の風について考えてみることにします。

太陽からの日射があると地面が暖められ、その上にある大気にはいろいろな対流が起こります。対流が強いときは、バルーンが安全に着陸できないので、穏やかな朝夕に競技を行います。

一見同じ方向に流されているように見えても、バルーンをよく見ていると、それぞれの位置関係が次第に変わっていくのに気がきます。風は、場所によって風向・風速が違います。特に上下方向でその違

熱気球と風

所員：内山隆文

いが顕著です。この風の違いは「シア」と呼ばれています。日射は佐賀の海の部分と陸の部分を暖めます。ところが、海水よりも土壌や岩石の方が温度変化しやすいため、日が昇ると、陸のほうが暖かくなります。地表に温度差が生じると、小学校の理科の授業で習ったように空気が動き始め、下層では海から陸に、上層では陸から海に空気が流れ、循環をするようになります。上層と下層とでは風向きが逆になります。この下層の海から陸に吹く風を「海風」といい、夏の日中に最もよくこの風を体感することができます。また、夜には陸のほう冷え、これとは反対のことが起こります。

実際には、そのときの広い範囲の気圧配置により生じる一般流にこの風が加算された形で吹きますので、もう少し複雑になりますが、場所によって、特に上下によって、風向・風速が違います。また、「風の息」と言うようにその強さも時々刻々微妙に変化します。その風に乗り、気球はいろいろな方向に動くことができるのです。こういった空間的な風の「シア」を読みながら選手達はそれぞれの気球を操縦しているわけです。

秋が来るのが待ち遠しいですね。

(写真協力：佐賀バルーンフェスタ組織委員会)

メッセージボード

平成10年度 短期研修講座

【研修申込締切】

1期	(4月～8月)	小・中学校	4月28日
		県立学校	5月8日
2期	(9月以降)	小・中学校	7月28日
		県立学校	8月7日

詳しい研修内容については、新年度に配布する「教育センター研修講座案内」をご覧ください。

平成10年度 教育論文募集の案内

先生方の実践研修の論文を募集します。
募集要領を4月に配布する予定です。

- ◆内 容 これからの学校教育に求められるもの（テーマは自由）
- ◆応募規定 原則として未発表のもの
- ◆対 象 県内公立の幼稚園、小学校、中学校、県立学校の教職員並びにグループ

編集・発行 佐賀県教育センター

〒840-0214 佐賀県佐賀郡大和町大字川上字西山

TEL 0952-62-5211 FAX 0952-62-6404

ホームページ <http://www.saga-ed.go.jp/>

《9-73》